

死生観に関する研究の概観と展望

臨床心理学コース 海老根 理 絵

The review and prospect of the studies on the view of death and life

Rie EBINE

In this article, studies on the construction of the view of death and life, as well as studies on the education of death and life, were reviewed.

Today we have a lot of problems on death, such as students commit suicide because of bullying, and children killing and wounding others. However, many previous studies on the view of death and life have focused on only particular groups (e.g., old people, patients in terminal care), and have not focused on general population, especially young population.

This review suggested that we should pursue research on the construction of young people's view of death and life, and conduct empirical research on the effective death and life education program in order for us to live happily.

目 次

- 第1章 問題と目的
- 第2章 死生観の構造に関する研究の概観
 - A節 死生観の構造に関する研究
 - B節 死に関する心理を測定するための既存尺度
- 第3章 死生観の育成に関する研究の概観
 - A節 死生観の育成とは
 - B節 学校教育における死生観の育成に関する研究
- 第4章 死生観に関する研究の課題と展望
 - A節 死生観の構造に関する研究
 - B節 学校教育における死生観の育成に関する研究

第1章 問題と目的

今日、病名の告知、脳死や臓器移植、いじめによる自殺、少年による殺傷事件など、死に関する問題が大きな社会的関心事となっている。その一方で、死について公に語ることはあまり好ましいこととは思われていないという現実がある。特に子どもや若い者が自分の死について語ることや、家族や親しい者の間で互いの死について語ることは、不吉である、縁起が悪いなどといって眉を顰める者も少なくはないだろう。確かに、死を考えることは、自らの存在の消滅、愛する者との別れ、未知への恐怖など、ネガティブなイメージを喚起させるということは事実である。

しかしながら、“人が目的のない虚しい人生を送ってしまう原因の一つは、死の否認であり、死を意識することによって、人間は最後の段階まで成長する”

(キューブラー＝ロス、1975) という意見や、“死が人間の創造的能力を開発する機会となる”(デーケン、1986) という意見もあり、死について意識し、考えることには有意義な一面もあるということを忘れてはならないだろう。

また、死とは誰にとって重要なテーマなのか、ということ考えたとき、それは老年期に属する人々、または不治の病に伏している人々のみが対象になるのではない。人はこの世に生を受けた瞬間から、いずれ死を迎えることは必然である。また今日、天災、そして人災により多くの人々がその貴い命を予期せぬ形で落としていく悲劇が後を絶たない。更に、人は生きていく中で必ず他者の死、それも愛する者、親しい者の死を経験するものである。小此木(1979)は、“我々は親しい他者との死別を経験することをきっかけとして、自分自身の死についても、あらためて思い知らされる。そのため、われわれは死という主題と無関係で居続けることはできない”と述べている。

今こそ、“死とは、我々全ての人間が対象となる重要なテーマである”(エリクソン;小此木訳1973)ということ再認識する必要があるのではないだろうか。

わが国では、1980年代から医学や看護教育、宗教学を起点としてデス・エデュケーションが行われてはじめてが、近年では、デス・エデュケーションは生涯教育や社会人教育のみならず、学校教育の場でも一部の教育者が実験的な試みを行っている。

こうした背景からも、意識しないまでも常に死と隣り合わせである我々が死をどのように捉え、生きるこ

とへと繋いでいるのかを理解するため、そして同時に、人々がより良く生きることを導く、質の高い教育や援助を行うため、死生観に関する研究を発展させることは極めて重要であると考えられる。

そこで本論文では、まず第 2 章において死に関する心理、その集合体としての死生観の構造を探った先行研究について注目する。次に第 3 章では、死生観の育成に関する研究、特に学校現場において行われてきた研究を中心に概観する。最後に第 4 章では、これら死生観に関する研究についての、今後の課題と展望についてまとめることとする。

第 2 章 死生観の構造に関する研究の概観

本章では、死に関する心理、その集合体である死生観の構造について解明することを目的とした研究について検討し、更にその中で活用されてきた既存尺度についても触れていく。死生観とは、とても曖昧な概念であり、その定義は研究者や各個人によって様々なものである。本論文では、死生観を、死を基点とした心理の集合体であり、ネガティブな心理やポジティブな心理を含めた多面的な心理概念として定義する。

A 節 死生観の構造に関する研究

死に関する心理を扱った先行研究では、80年代後半までは、その対象がターミナル期にある人々や、老年期の人々といった、特定の集団が中心であったことも影響しているのか、死に関する否定的な部分に焦点をあてたものも多く、今後は“死をより多面的に捉える必要があるのではないか”（金児, 1994, デーケン, 1986）という指摘もあった。そして近年では死に関するネガティブな心理のみを捉えるのではなく、死に関するポジティブな心理についても検討し、死を多面的に捉えようという動きが見られる。

本節では、死生観というキーワードが使われていない場合でも、死のネガティブな面のみ注目せず、ポジティブな面も含め、死についての心理について明らかにしようとした研究を死生観の構造に関する研究として扱う。そして、これらの研究を、日本人、世代、集団、その他の要素との関係という 4 つのキーワードから検討していきたい。

まず第一に、日本人の死生観に焦点を当てた研究として、平井、坂口、安部、森川、柏木 (2000) や、丹下 (2002) の研究の意義は大きい。平井他 (2000) は、死生観尺度を開発し、それにより死生観を多次的、

包括的に捉えることを試みている。この結果から死生観や死に対する態度を構成するものとして、“死後の世界に関すること”“死に対する恐怖や不安に関すること”“解放としての死に関すること”の三つを挙げ、日本人の死生観における主要な構成要素であると推察している。

丹下 (2002) は死からの連想語を KJ 法により分類することによって死生観の構造の検討を行っている。研究の結果、死の連想語の分類により得られたものとしては、具体的な死の種類、信仰、文化に根ざした死の連想、感情反応等があり、具体的な死の種類の中には事件、事故、災害、自殺など、外的な原因が多かったと報告しており、これを“我々が日常生活において接する死が内的な原因のものである場合よりは、むしろメディアを通して報道される事故や事件の犠牲者のものである場合が圧倒的に多いということの反映である”（丹下, 2002）と解釈している。また感情反応カテゴリへの言及では、ネガティブな感情反応を中心としているものの、ポジティブな感情反応も示されていたとし、これらのことから死に対する態度の研究において、否定的な態度のみに焦点づけるのではなく、肯定的な態度についても目を向けることの必要性を挙げている。

これまで、死生観について、特に尺度を使い、量的に探ろうとした研究の多くは、欧米の尺度の翻訳版を使用したものが多く、そのため、尺度の内容はキリスト教的背景により作成されたものも多く、日本人の死生観を探るには十分でないという難点もあった。その点に関して上記の二つの研究では、日本人の死生観という点に絞っての尺度作成、調査を行っており、日本人独自の死生観の特徴を把握するために大きく貢献していると言える。

第二に、特定の世代に焦点を当て、その世代特有の死生観の構造を明らかにしようとした研究がある。これには老年期にターゲットを絞って研究を行った河合、下仲、中里 (1996)、青年期、成人期の死生観を対象に研究を行った丹下 (1999, 2004)、そして、3歳から13歳の子どもについて研究を行った仲村 (1994) の研究等がある。

河合他 (1996) は老年期における死に対する態度を測定し、高齢者が死に対しどのように感じているのか、また、さまざまな要因が死への態度とどのような関連をもっているのかを解明することを目的として研究を行った。その結果、諸外国と比べてわが国の高齢者は死への不安や恐怖が高いことが示され、死、その

ものより、死ぬ際の苦しみについての恐怖が大きいと推察している。また、死後の世界を肯定的に評価するよりも、現世からの回避により死を受け入れる傾向が認められたと報告している。

丹下 (1999, 2004) は青年期における死に対する態度尺度を作成し、青年期前期中期を対象に多次元の死に対する態度の発達を測定することを試みている。その結果、青年期前期、中期にあたる中学生、高校生においては、死に対する態度は主に中学の期間を中心に年齢に伴い変化しており、概して死に対する否定的な態度が減少するとともに生に対する積極的な態度が減少することが示されたという。このことから生きることにに対して積極的でありながら死に対しても肯定的な見方ができるという成人期後期の状態を最終的な到達点とした場合、それに至るまでに一時的に生に対する積極性と死に対する否定的な態度が共に低下するというのが青年期前期・中期の特徴ではないかと推察している。

仲村 (1994) は、3歳から13歳の男女205名の子ども達に個別にインタビュー調査を行った。その結果、幼児期の子どもは生と死が未分化であり、現実と非現実の区別がなされておらず、児童期辺りから死の普遍性、非可逆性等を理解するようになり、死後の世界への想像や、願望、希望などが膨らみ始め、年齢が高くなるに連れて生まれ変わりの思想の増加が目立つようになると推察している。

これら、世代による死生観の構造について明らかにしようとした研究は、各世代における死に関する概念発達や、死生観の特徴を捉えることに寄与しており、そこから援助や教育において重要な情報を得ることができるであろう。

第三に特定の集団の死生観に着目した研究がある。竹下、魚住、渡辺 (2001) は看護学生による生と死のレポートから、研究者間でKJ法を用いて死生観に関する30項目を設定し分析を試みた。そして“生き方”“死の受容”“死のイメージ”“生のイメージ”“否定的な死”の五つのカテゴリに分かれる尺度により学年ごとの差を測定した。その結果、実習体験を終えた高学年では、死に対してより不安感を抱き、否定的にとらえながらも、“生きることは死に近づくこと”についてより肯定しているとし、“自分自身もいつかは死を迎える”という自らの立場で死を捉えていると推察した。

新見 (2002) は、“人生の意味・目的意識”“実存的空虚”を測定するスケールであるCrumbaugh J.C.らによって考案された“Purpose in Life Test”の日本語版を

用い、看護学生の死生観を測定した。その結果、感情として死は受け入れられていない様子が見られ、認知的側面においても死を自分のこととして向き合い、受け止めている学生は少なく、死に対して否定的に捉える者や、考えない者、一般的な死としてしか認識できない者が多いと推察している。

大山 (2003) は平井他 (2000) らによって開発された死生観尺度を用い、看護職と看護学生の死生観の傾向に関する比較研究を行った。その結果、“死への恐怖・不安”では、看護職および学生ともに高く、逆に“死からの回避”傾向は共に低いこと、“死後の世界観”では学生が有意に高いこと、“寿命感”が看護職において有意に高いということがわかった。この結果から看護職集団は日々のケアの中で死が日常化しており、ターミナルケアによる看取りの体験、経験年数などが死生観に関与しているのではないかと推察している。

このように、集団としての死生観の構造や特徴に焦点を当てた研究は、現状として看護師や、看護学生を対象にしたものが多い。しかしながら死生観の育成は、医師や、その他の医療従事者においても重要であり、更に一般の人々においても大切であることを考えると、今後はより様々な集団を対象とした研究が必要となるだろう。

最後に、死生観とその他の心理的要素との関係を扱った研究を挙げる。これには、澤井 (2001) や、人見、塚原、宮原、菊井、小柴、中西、影本、近藤、柳 (1997)、中村、井上 (2001) の研究がある。

澤井 (2001) は現代日本の死生観を、マスメディアなどから受ける死や死別をめぐる現代人のイメージと、日本社会の社会構造やその歴史的変遷との関連を明らかにすることによって分析することを試みた。メディアにおいて、例えば“家族や友人との温かい心の交流のうちに迎える死”ということが望ましい死のイメージとして宣伝されると、そのイメージ自体が、ある種の強制力となり、そこから外れるものは異端として排除する力を生み出すことになると警告している。

人見他 (1997) は、高齢者のターミナルケアにおける、ソーシャルサポートの現状として、看取りの中心となる嫁に焦点をあて、聞き取り調査から家族関係の中での嫁の義親の看取りにおける悲嘆の回復過程に関連する影響要因を追った。その結果、嫁が義親を看取る過程の中で家族関係、嫁をサポートする人間関係、地域とのつながりといった様々なテーマに変化があり、嫁が義親の看取りの意味づけを行っていく上で、

各テーマが絶えず変化していくこと、また、悲嘆を決める要因として特に愛着の特徴、パーソナリティ、社会的支援の3要因が強く影響していることなどを推察している。

中村他(2001)は、人々の抱く死生観を心理的幸福感への影響要因として位置づけ、生き方にどのような作用を及ぼすのかについて検討した。この結果、宗教性の否定が、努力的、共同的、多彩的な生き方意識を遠ざける要因となっていることを挙げ、肯定的イメージを生に対して、死に対しても持つことが幸福感を高める一つの要因として考えられるとしている。

このように、死生観とその他の要素との関係を探った研究からは、死に向き合うことに苦しむ人々に対する援助の内容の検討や、死生観の育成を目的とした教育を行う上での留意点など、様々な情報を得ることができると考えられよう。

本節では、死に関する心理、死生観の構造に関する研究を四つのキーワードから概観した。これら、死生観の構造や特徴を捉えるための研究は、我々が実際、死ぬこと、生きることについてどのように捉え、その捉え方はどのような要因によって影響を受けるかを明らかにすることに貢献してきたと言えよう。

次節では本節で検討した先行研究の中において使用されてきた尺度も含め、定量的に死の心理を測定することを目的として作成された既存の尺度について振り返る。

B 節 死に関する心理を測定するための既存尺度

死に関する心理、死生観の研究を行うにあたり、その構造を把握するため、またその変化の過程やそれに影響を与える様々な要因を把握するため、これまで数多くの尺度が作成されてきた。本節ではこれら、死に関する心理を測定するための既存尺度について概観する。

まず死の心理を測定するために作られた尺度として、感情に焦点を当てたTempler(1970)のDAS、そして死に関する感情だけでなく、受容(行動、もしくは認知とも受け取れるであろう)も扱ったWong(1997)のDeath Attitude Profile-revised(DAP-R)の2つの尺度は、国外はもとより、日本でも最も頻繁に用いられた尺度として存在する。

TemperのDAS、日本語名、“死への不安尺度”は、“I'm very much afraid to die 私は死を非常に恐れている”“The sight of a dead body is horrifying to me 死体を見ることは私にとって恐ろしいことである”などといった

項目から構成されている。これは文字通り、死に対する不安や恐怖を測定する尺度であり、心理の中でも、ネガティブな感情面に焦点を当てていると言える。

Wong(1997)のDeath Attitude Profile-revised(DAP-R)に関して言えば、死を恐怖や不安といった一側面だけからではなく、“Approach-Oriented Death Acceptance 積極的死の受容”“Fear of Death 死への恐怖”“Escape-Oriented Death Acceptance 回避的死の受容”“Neutral Death Acceptance 中立的死の受容”といった四つの面から捉えようとしているのが特徴である。特に評価できる点として、“死の受容”について三つの観点から測定しており、純粋な“死の受容”と希死念慮との区別を試みている点が挙げられる。しかしその一方で、例えば、“Approach-Oriented Death Acceptance 積極的死の受容”の中における項目には“I look forward to a life after death 私は死後の新たな人生を楽しみにしている”“I see death as a passive to an eternal and blessed place 私は死を永遠の幸福な場所への道だと考える”など、いささか、特定の宗教的(キリスト教的)背景に限定された“死の受容”を意味するような項目内容も見られ、日本人の死に関する心理を測定する尺度としてはやや偏りがあることも否めない。

他にもSpilka(1977)のDeath and personal faithなどもあるが、Wong(1997)のDAPと同様の理由で日本人を対象に利用する上では考慮すべき点があると思われる。

次に、日本人の死に関する心理を探ろうと用いられた尺度にはどのようなものがあるであろうか。

日本人の死に関する心理を測定する目的で作られた尺度には、DAS、DAPをはじめとした海外で作られた尺度を日本語訳し、修正を加えたもの、例えば、改定前のDAP(Gessar & Wong, 1987)の日本語版、死に対する態度尺度(河合・下仲・中里, 1996)やSpilka(1977)のDeath and personal faithの日本語版、死観尺度(金児, 1994)などがある。

死観尺度(金児, 1994)は、“浄福な来世”“挫折と別離”“苦しみと孤独”“人生の試練”“未知”“虚無”の六つの因子から成り立つ。また、Spilka(1977)の尺度における“家族との別離”と“挫折”が“挫折と別離”という一因子に、そして“勇気としての死”と“無関心”が日本語版では“人生の試練”“虚無”と名づけられ、“自然な終焉”は項目分析により削除されたとしている。金児(1994)この尺度とDAS(1970)を使い、親子の死生観を多次元的に測定することを試みた。

日本独自の死生観を多次元的に捉えようとした尺度

としては他に、前節でも記述したように、丹下（1999）の死に対する態度尺度、平井他（2000）の死生観尺度がある。丹下（1999）の作成した死に対する態度尺度は“死に対する恐怖尺度”“生を全うさせる意志尺度”“人生に対して死が持つ意味尺度”“死の軽視尺度”“死後の生活の存在への信念尺度”“身体と精神の死尺度”の六つの下位尺度から構成される。また、この尺度においては、“主体となる本人が自己の死もしくは一般的な死に対して抱えている態度を主眼にすえ、他者の死を想定する場合はそれ自体に対する焦点付けではなく、他者の死によって主体者側に喚起される反応を扱っていく”ということが留意点として示されている。回答者にとってそれが誰の死かということを確認にすることの大切さを意図して作成されていることには大きな意義があると考えられる。

平井・坂口（2000）らにより作成された、死生観尺度は日本人の死生観を測定するための尺度であり、その構成は“死後の世界観”“死への恐怖・不安”“解放としての死”“死からの回避”“人生における目的意識”“死への関心”“寿命感”という七つの下位カテゴリに分けられている。その内容は、死への恐れ・不安という否定的側面だけでなく、“人生における目的意識”という死における肯定的側面を含んでいる。また、死そのものに対する態度だけでなく、死に関連した事象、すなわち死後の世界や寿命に対する態度も測定することが可能であるとしている。研究の結果から、“この死生観尺度は日本人の死生観を多角的、包括的に捉えることができると考えられる”とし、また、従来の死生観関連尺度に比べ、より簡便な尺度となっていることも特徴として挙げられる。

更に、より測定目的をはっきりとさせた尺度として、藤本、本多（2003）のDeath Competency尺度がある。藤本他（2003）は、デス・エデュケーションの効果は死への不安以外にもあるという視点から、死に関する心理を発展させ、死に対処するための能力を測る尺度としてこの尺度を作成した。大学生、大学院生を対象として作成されたこの尺度は死に対処する能力を“自分に身近な死に対する能力”と“概念的な死に対する能力”の二つにわけ、そのうち“自分に身近な死に対する能力”は更に“身近に起こりうる死について考える能力”、“身近に起こりうる死に対処する能力”、“死に対する親和性”の3つに、“概念的な死に対する能力”は更に“他者の死を受けとめる能力”“死を意味あるものと認める能力”の二つに分け、合計5つの側面から測ることができるものとしている。

このように既存の尺度を概観してみると、死を多角的に扱おうという動きへと向かいつつあると言える。

教育的視点から鑑みても、不安や恐怖といったネガティブな感情面にのみに注目するのではなく、死に関する心理の多角的な把握が必要であり、このような尺度の変遷が見られるのも当然であろう。また、今後は、藤本他（2003）のDeath Competency尺度のように、効果測定など、研究における実証的な検証を行うためのツールとして活用できるような、目的がより焦点化された尺度の開発もまた必要であると考えられる。

第3章 死生観の育成に関する研究の概観

第2章では、現状として我々の死に関する心理、死生観がどのようなものであるかを明らかにすることを目的とした研究について概観した。本章では、いつの日か必ず死を迎える我々が、最期までの人生をよりよく生きるため、死ぬこと、生きることについて考え、自分なりの死生観を育成するため、どのような教育が行われており、どのような成果を上げているかについて検討した研究について着目する。

A節 死生観の育成とは

本節において、死生観の育成を目的とした教育とは、個人にとって生きる意味、死ぬこととは何かについて考え、命の尊さについての認識を深め、死や生に伴って生じる様々な問題について学び、考察することを目的とした教育と定義する。このような教育は、医療現場、学校教育、生涯教育において、デス・エデュケーション、死の準備教育、いのちの教育、生と死の教育、こころの教育など様々な呼ばれ方をしてきた。

このような死生観の育成に関する先行研究のうち、実証的なものの多くは医療従事者、特に看護師や看護学生を対象として行われたものが中心である。しかしながら、第1章でも述べたように、死生観の育成はもはや、ターミナル期にある人々、医療従事者等、特定の対象に向けられるものではなく、我々全ての人間にとって必要なことであり、特に若い世代における死生観の育成は社会的背景からも急務であると考えられる。そこで本章では若い世代に対する教育現場、つまり学校教育における死生観の育成の研究に焦点を絞り、概観することとする。

B節 学校教育における死生観の育成に関する研究

わが国の学校教育における死生観の育成の実践的な試みとして、兵庫県教育委員会が平成十七年度より行っている、“命の大切さを実感させる教育プログラム”がある。同県では小学校、中学校、高等学校の発達段階に応じた、命の大切さを実感させる教育プログラムを研究・開発し、実践している。それに対し、兵庫県のみならず、全国各地から問い合わせが多く寄せられたという。これも、“命の大切さ”を含む、死生観の育成に対する関心の高さの現れであると言ってよいだろう。しかしながら実際、死生観の育成がこのように公の教育プログラムとして継続的に実施されている例は少なく、その実践の多くは、教師がそれぞれのオリジナリティにより個別で試行しているという現状である。そのためか、効果を実証的に扱った研究はほとんどないに等しく、実践例やその感想を単純に報告したものがほとんどである。

以下において、死生観の育成に関する研究として、小学校・中学校・高等学校・専門学校・大学の順に取り上げる。

まずは小学生を対象とした研究である。高橋(2005)によれば、小学生を対象とした死生観の育成の実践は比較的多くなされており、その報告も多いという。

小学校では動物の飼育を使用した教育実践も目立つ。こうした授業の研究報告には、南雲(2006)、中川(2007)の例がある。南雲(2006)はモルモットの飼育を通し、小学校一年生に対し、いのちの学習のプログラムを行った。名前をつけること、獣医から話を聞くこと、モルモットの出産を通し、子どもたちはモルモットが死んだら生き返られないという命の不可逆性を実感したと報告している。また、中川(2007)は、小学校における動物飼育の教育的効果を検討するため、動物飼育を位置づける学校の四年生の作文と、他校の六年生の作文を検討した。その結果、他校の生徒と比較し、動物飼育を位置づけた学校の生徒の作文には周囲との関わり、自他に対する肯定感等に加え、生命尊重などが表現されていたとした。

また、生きることは他の生物の命の犠牲に成り立つことに注目した、日下(2000)、弘中(2006)の授業がある。弘中(2006)は“忘れられない御馳走”という資料を使って“いただきます、ごちそうさま”の意味を考える授業を行った。授業後、ほとんどの場合、給食の残菜が少なくなり、自分のいのちを支えてきたものが他のいのちであることに気づききっかけとなったと報告している。日下(2000)は、“クモの巣にチョ

ウチョウがひっかかっていた。あなたならどうする?”という問いを生徒に投げかけ、このテーマにおいて家族とも対話させ、生きることは他の生きものの命をいただいていることだということに気づくことの大切さを訴えた。

更に、金森(2000)は授業の中で、切迫流産であったこと、出産後、仮死状態だったことなど、生徒たちが胎児期において、常に死と隣り合わせであることを、彼ら自身の母親に語ってもらうという機会を設けた。結果、生徒たちの多くは自分たちが奇跡的な存在であることに納得したと報告している。

このように小学生を対象とした授業は取えて動物の死を活用することや、家族の対話を取り入れるなど工夫がされているものが多い。

次に中学生を対象とした研究には、高橋(2005)、松野(2005)、天野(2004)の研究がある。高橋(2005)は中学校二年生を対象に「100万回生きたねこ」を朗読し、その感想をまとめること、余命半年と宣言されたらどんな気持ちになるか、どんな行動をとるかについてのディスカッションを行うこと、ホスピスへ訪問することといったプログラムを導入した。ディスカッションを通し、生徒たちからは自発的な発言や質問が多く出され、学習計画後にも生徒たちの追求意欲が継続していたことが大きな成果であったと報告している。松野(2005)は道徳授業を通し、全校生徒を対象に新聞記事を使った授業を行った。沖縄で実際に起きた少年犯罪の事件をもとに、少年犯罪の実名報道はすべきかすべきではないかについて被害者、加害者の立場でディスカッションを行った。その結果、感想から子どもたちが自分の命を見つめ、他者の命に思いを馳せ、自らの生き方を深く考えるようになったと報告している。天野(2004)は無用なショックを避けるため、人ではなくペットや動物の死を取り上げた授業を展開した。また、ディスカッションを行う際、話したくない生徒のための席を設けた。ここでは発言は強要しないルールであった。結果、生徒から、話を聞いて悲しくなった、話さない席があつてよかったという作文があり、授業づくりにおける配慮の必要性を報告している。

中学生を対象とした研究報告では、配慮という言葉がキーワードとなる。思春期に位置づけられる世代にある彼ら対し、死を題材とした教育は、性と同様に教育者側のタブー視が最も強い世代であると言えよう。

次に、高等学校を対象とした研究である。熊田(2000)は一年間という継続的な授業を展開した、古

田 (2005) は高校一年生の現代社会の中で、十から十二回の生と死の教育を行った。その内容は、八代まで遡った家系図の作成を通して命のつながりについて考えるもの、大切な人の死について残された者の悲嘆のプロセスを学ぶもの、ドキュメンタリービデオを視聴するといったものである。その結果、最も生徒に印象に残った講義は“死に別れた人の悲しみ”であり、生徒の三分の一にのぼったという。得丸 (2008) が“学校現場では特に二人称の死には大きなタブーがある”と記述しているように、学校教育ではまだまだ大切な人の死を扱うことが難しい中、このような研究結果が報告されていることには大きな意味があるだろう。また、授業後のアンケートでは、授業を受けたことにより、64%の生徒が死について以前より考えるようになり、“死ね”“殺すぞ”という言葉を使う頻度が少なくなったという生徒が50%近くであり、高等学校でのいのちの授業を行うことに意味があると答えた学生は88%であったと報告している。真鍋 (2005) は農業高校において鶏の解体を授業に取り入れた。事前指導において“いただきます”の意味を考えること、命のつながりを実感させることなどを行った。研究報告にはと殺し、解体し、“いただきます”の意味をかみ締めながら試食するまでの過程が報告されている。影山 (2005) は工業系高専の学生を対象に行った授業について報告している。授業構成は死生学の骨子として、死を自分自身の問題として視野にいれ、さらに他者の生、他者の死に思いを馳せること、自分に合った人生を探すことを講義し、後半ではホスピスで働く医療従事者からチームワーク医療のケア、最期まで自分らしく生きることをサポートする場としてのホスピス、ターミナルケアについての講義を行った。結果、授業後の気持ちの変化として、変わっていないという生徒は三分の一程度であったと報告している。大宮・落合 (2003) は安楽死ビデオや羊水検査のビデオを使った視聴覚教材を使った授業、ホスピスや介護施設への訪問や、がん患者から話を聞くことなどを通じた授業を行った。その結果、授業の前後において家族への信頼、校内友人への信頼が有意に高まったことを報告しており、いのちの授業の実践は生徒の自尊感情の高揚をはかるという結果報告をしている。

このように、高校生を対象とした研究では、彼らの理解度の高まりに応じた知識型の講義も増えているという特徴があり、研究結果においては量的なデータが存在するものも多く、他世代に比べ進んでいると言える。

最後に大学生を対象とした研究である。木村 (1989) は理学部・医学部、法学部の学生に対し、インフォームドコンセント、尊厳死、ターミナルケアなどについての講義形式の授業を行った。その結果、生徒の中には授業の前後で癌告知の是非について真剣に考えるきっかけとなったと報告する者が多く、授業前には脳死を死と認めるべきと答えていた者十八人が、講義後には“心停止を死とするべき”、“まだわからない”へと変わったと報告している。赤澤・辻本 (2003) は、オリジナルの教材を使つての講義、ワークを取り入れて大学生、大学院生を対象として介入実験を行った。その結果、“死への関心が増え、抑うつ感に改善が見られた”としている。中出 (2004) は大学生を対象にA・デーケンの死とどう向き合うかを基本資料とし、VTR教材も併用しての授業を行った。その結果、学生のレポートの中では“死”と“生きる”の語彙が十回以上、“家族”“受け入れ”“愛”という語彙が平均三回出現し、肯定的語彙の出現が多かったと報告している。

特に赤澤・辻本 (2003) や、中出 (2004) の研究では量的研究として、対象者の人数が少なく、研究結果の妥当性としては充分とは言えない。しかしこれまで死生観の育成における実証的研究が行われてきたことが皆無に近かったことを考えれば、彼らが行った実証的な効果研究活動には大きな意味があると考えられる。

第4章 死生観に関する研究の課題と展望

本論文では、ここまで、死生観に関する様々な先行研究のうち、主要なものとして、構造の解明について、及び、育成についての二つテーマに焦点を当てて検討してきた。

死生観に関する実証的研究には、社会におけるタブー視という点からも多くの困難さが伴う。しかしながら、その困難さを考慮した上でも、我々がよりよく生きるための道しるべとして、これらの研究が社会に果たす貢献は大きいと言えよう。

本章では、今後、心理的な援助、教育に寄与するような研究の発展を目指す上での課題、展望について、第1節では、死生観の構造に関する研究を、第2節では死生観の育成に関する研究を中心にまとめる。

A節 死生観の構造に関する研究

死に関する心理、死生観の構造に関する研究の課題としては、以下の3点が挙げられる。

まず第一に特殊集団、特に看護師や看護学生を扱ったものに比較し一般集団の死生観を扱った研究が少ないという点がある。死について意識し、自分なりの死生観を確立することは特殊集団に対してだけでなく、一般集団においても必要であるとすれば、今後、一般集団、特に、若い世代が現状として、死に対し、どのように捉え、それはどのような要因により変化しうるのかという点に注目すべきではないだろうか。

第二に先行研究では、死に関する心理の中でもネガティブな感情が扱われることが多く、特に認知の部分に焦点を当てた研究が少ないという点がある。これまで、死生観の育成を考える上では、ターミナル期にある人々やそれに対応する医療従事者向けの教育に焦点が当てられてきたことから、死を間近にした人々の苦難としての不安、恐怖といった感情が多く扱われてきた。しかしながら今後、一般の人々、特に若い世代の教育を念頭に入れた場合、不安や恐怖の軽減といった感情のみに注目しているのでは事足りない。更に、実証的な研究を行う上では、感情や行動の変化を促すためにこそ認知面へのアプローチは重要であると考えられる。

第三に、先行研究では、想定する死の対象は区別されず、一般的な死、概念的な死として扱われてきたという点がある。つまり、これまで研究において扱われてきた一般的な死とは自分の死、大切な人の死、他人の死といった様々な死が混在したものであったと考えられる。研究において扱う死が、被調査者にとって誰の死であるかについて明確にした上での調査が必要であり、こうした配慮こそが今後研究結果の反映される実践の質に大きく関わると言えよう。

B節 学校教育における死生観の育成に関する研究

本節では、学校教育における貢献を目指した死生観の育成に関する研究の課題と展望について検討する。以下において先行研究における問題点として、年代でのばらつき、内容の偏り、実証的研究の少なさの三点について検討していく。

第一に、年代のばらつきについてである。高橋(2005)によれば“中学校では生命の大切さを扱う領域は、性教育や道徳というような固定観念で捕らえられていることが多く、継続的な実践にまで至らず、また、高等学校のように宗教や倫理観の比較等を扱うことが内容的に難しいこと”という理由から学校教育では他の年代に比べ、中学校での実践報告や研究が少ないという。しかしながら近藤(2004)によれば、

八割強の学生が死について考えた経験を十から十五歳の間にかけて持っているといい、山崎(2003)も学生の八割が小学校高学年までに死を意識するようになったという調査結果を示している。また稲村、小川(1983)によれば死の概念の発達は10歳以上ではほぼ大人と同じ感覚で死を捉えることができるとしている。このような背景から、中学生というのは死の概念の発達がある程度達成しており、死を意識し、考えた経験を持つことから、死生観の育成を始める上では、最も適した年代といえるのではないだろうか。さらにこの年代は、死に関する多くの問題を抱える年代でもある。この年代における実践的研究の遂行は今後の課題となるであろう。

第二に内容の偏りについてである。学校教育における、特に若い世代を対象とした死生観育成の目的には、自分の死を意識することにより、生きることの意味を考え、今後の自分の人生への捉え方を見直したり、大切な者の死を意識することにより自分とその人の関係性を見直したりと、今後の人生をよりよく生きることが促進することが考えられる。

先行研究を概観すると、幼少期、小学生に対しては、絵本を使ったプログラム、ビデオプログラムといった、死の疑似体験を手段とした実感型プログラムを行った授業の研究報告が多い傾向にあるのに対し、高校生、大学生と年代が上がるに連れ、例えば、臓器移植についての講義や、ゲストによるホスピスについての講義など、知識型プログラムの研究などが増える傾向が見受けられる。これらは成長と知識の理解度に焦点を当てた結果と考えられ、自然な傾向であるとも言えよう。しかしながら、年齢が上がったからといって実感型のプログラムが必要なくなるわけでないわけではない。死の概念が確立し、死別体験を経験する機会が増えてくる年代であるからこそ、知識型プログラムと同様に実感型のプログラムが必要であり、効果が得られやすいとも考えられよう。今後、この年代において実感型プログラムの研究がなされることで、より効果的なプログラム開発のための情報が得られるであろう。

第三に実証的研究の少なさについてである。先行研究の概観を通して最も大きな問題であることは、その実証的研究の少なさである。先行研究の多くは、実践報告、感想の記述がほとんどであり、その効果を量的、または質的に検討しているものは極めて少ない。今後より良い死生観育成のための教育を行う上では、プログラム実施前後での量的な効果測定を行うこと、実施

に伴う、死に関する心理的变化について、面接データを丁寧に分析すること等により、死生観の育成の効果を実証的に検討する必要がある。

以上三点についての改善は今後、死生観に関する研究の発展において極めて重要なものである。

しかしながら、研究の発展に向かう前に改めて意識すべき留意点がある。それは、死生観に関する研究が、他の研究以上に倫理的配慮が必要とされるということである。特に学校教育現場においては、それぞれの生徒においての死別体験の有無や、死の概念を含んだ心の発達に対して目を配ること、そして、家族の理解を得ること、またプログラム中には、気分転換を測るようなリラクゼーションを取り入れるといった、研究者側のきめ細やかな対応が必要となるであろう。

(指導教員 下山晴彦教授)

引用・参考文献

①論文

- 赤澤正人・辻本寛和 2003 デス・エデュケーションが及ぼす効果に関する研究～試作プログラムによる介入実験を通して～ 臨床死生学年報 大阪大学大学院人間科学 研究科 人間行動学講座 臨床死生学研究分野, 第8号, 2-14
- 天野幸輔 2004 中学校授業におけるいのちの教育-ペット・動物の死をめぐる実践から「授業者の留意点」を考える- ターミナルケア 青海社, 3号, No14, 198-201
- 古田晴彦 2005 高等学校における「生と死の教育」(特集 生と死の教育) 教育と医学, 53(6), 530-537
- Gesser, G., Wong, P.T.P., & Reker, G.T. 1987 Death attitude across the lifespan: The development and validation of the death attitude profile (DAP) Omega: Journal of Death and Dying, 18, 113-128
- 平井啓・坂口幸弘・安部幸志・森川優子・柏木哲夫 2000 死生観に関する研究—死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証— 死の臨床, Vol.23, No.1
- 弘中邦典 2006 自然保護・食から「いのち」の大切さを学ぶ 特集「いのち」を大切に育てる心 児童心理 金子書房, 60, 86-92
- 人見裕江・塚原貴子・宮原伸二・菊井和子・小柴順子・中西啓子・影本妙子・近藤功行・柳修平 1997 高齢者のターミナルケアにおけるソーシャルサポートの現状と課題(第2報) —嫁の義親の看取りの意味とその構造— 川崎医療福祉学会誌, Vol.7, No.2, 327-333
- 藤本欣也・本多妙 2003 Death Competencyの構成と尺度作成 臨床死生学年報 大阪大学大学院人間科学 研究科 人間行動学講座 臨床死生学研究分野, 第8号, 15-29
- 稲村博, 小川捷之 1983 死の意識 共立出版, 55-64
- 影山由利 2005 工業系高専への「生と死の教育」出前授業の試み 教育と医学, 53 (6), 546-553
- 金森俊朗 2000 私たちは奇跡的な存在! —小学校三年生と共に創る性と死=いのち・生の学び 現代のエスプリ 至文堂, 394, 68-77
- 金児曉嗣 1994 大学生とその両親の死の不安と死観 人文研究 大阪市立大学文学部紀要, 46, 1-28
- 河合千恵子・下仲淳子・中里克治 1996 老年期における死に対する態度 老年社会科学, 17, 107-116
- 木村正治 1989 大学生を対象にした「死の教育」(Death Education)の実践とその評価 学校保健研究, Vol32No.9, 443-450
- 近藤卓 2004 いのちの教育と学校カウンセリング 保健の科学, 第46巻, 第10号, 731-735
- 熊田亘 2000 イマドキの高校生と学ぶ「死」(生と死から学ぶいのちの教育)高校における取り組み 現代のエスプリ 至文堂, 394, 137-145
- 日下義明 2000 現代のエスプリ 至文堂, 394, 39-47
- Levin, R. 1989 A reexamination of dimensionality of death anxiety Omega Journal of Death and Dying, 20, 341-349
- 真鍋公士 2005 農業高校での「命の教育」 教育と医学, 53, 554-563
- 松野卓郎 2005 命を見つめ、生き方を問う道徳指導—「わたしの命 あなたの命」の実践を通して— 道徳と教育, 49, 15-27
- 南雲千恵 2006 身の回りの「いのち」と触れ合う—モルモットの飼育, 自分の誕生・成長の学習を通して 特集「いのち」を大切に育てる心 児童心理 金子書房, 60, 79-85
- 中川美穂子 2007 小学校における動物飼育活用の教育的効果のあり方と支援システムについて お茶の水女子大学 子ども発達教育研究センター紀要, 4, 53-65
- 中出佳操 2004 生涯学習における命の教育実践と評価に関する一考察 生涯学習研究と実践, 6, 129-139
- 中村雅彦, 井上実穂 2001 死生観が心理的幸福感に及ぼす影響 愛媛大学教育学部紀要 第1部教育科学, 47 (2), 59-99
- 仲村照子 1994 子どもの死の概念 発達心理学研究, 5(1), 61-71
- 新見明子 2002 看護学生の死生観—Purpose in Life Test分析より 川崎医療短期大学紀要, 22, 25-30
- 大宮美智枝・落合優 2003 高等学校におけるいのちの教育の研究・第一報 横浜国立大学教育人間科学部紀要 I, 教育科学, 5, 117-136
- 大山由紀子, 沖野良枝 2003 看護職と看護学生の死生観の傾向に関する比較研究 日本看護学会論文集, 34, 75-77
- 澤井敦 2001 現代日本の死生観と社会構造(下) 大妻女子大学人間関係学部 人間関係学研究, 2, 235-251,
- Spilka, B., Stout, L., Minton, B., & Sizemore, D. 1977 Death and personal faith: A psychometric investigation. Journal for Scientific Study of Religion, 16, 169-178
- 高橋和久 2005 「生と死の教育」に関する実践的研究～総合的な学習の時間におけるデス・エデュケーションの取組を通して～ 道徳と教育, 49, 5-14
- 竹下美恵子, 魚住郁子, 渡辺弥生 2001 看護学生の死生観に関する研究(第3報) 領域別臨地実習前後の比較 日本看護学会論文集, 32, 76-78
- 丹下智香子 2002 「死」からの連想後のKJ法による分類——死生観の構造の検討——名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 49, 157-168

- 丹下智香子 1999 青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討 心理学研究, Vol10, 4, 327-332
- 丹下智香子 2004 青年前期・中期における死に対する態度の変化 発達心理学研究, 第15巻, 第1号, 65-76
- Templer, D.A. 1970 The construction and validation of a Death Anxiety Scale Journal of General Psychology, 82, 165-177
- 山崎祐二 2003 資料報告 看護・医療系短大等における「死の教育学」の実践(2) 日本赤十字武蔵野短期大学紀要, 16, 37-46

②単行本

- A・デーケン 1986 死への準備教育の意義:生涯教育として捉える 死への準備教育1巻 死を教える メヂカルフレンド社
- エリクソン, E. H. 小此木啓吾 (訳編) 1973 自我同一性—アイデンティティとライフサイクル 誠信書房
- エリザベス・キューブラー・ロス著 鈴木晶訳 2001 中央公論新社
- 小此木啓吾 1979 対象喪失 中央公論社
- 佐野 洋子 1977 100万回生きたねこ 講談社
- 得丸定子編 2008 「いのち教育」をひもとく—日本と世界— 現代図書
- Wong, P.T.P., Recker, G.T., Gerrser, G 1997 Death attitude profile-revised: A multidimensional measure of attitudes toward death In R.A. Neimeryer(Ed.) Death Anxiety Handbook: Research Instrumentation and Application.

③その他

- 梶田徹一 2007 「命の大切さ」を実感させる教育プログラム<http://www.hyogo-c.ed.jp/~inochi/>